

西田幾多郎博士作品を吟ずる
第十七回全国吟詠大会からの指定吟題

① 秋夜読書

ひとり坐せば 寥々として『秋気涼し』
案頭『巻を披けば 感方に長し』
隙風来り襲つて『燈光乱れ』
明月『輝々として 草堂を照らす』

② 秋郊聞笛

秋郊の風景『滿眸晴れたり』
寂寞として『遙かに聞く 玉笛の声』
尤も憶う 今宵『感慨多しと』
他郷『忽ち起こす 故郷の情を』

③ 春園歩月

地上の清光『霜を踏むが如し』
夜遊ぶ『恰も仙郷に到るに似たり』
好きかな 春月『花上に輝けること』
一苑『東風に万樹香し』

④ 秋夜故郷を思う

夜風は『颯々として涼し』
明月は『白きこと霜の如し』
独り坐す『書窓の下』
頭を『低れて故郷を思う』

⑤ 無題

歲月『流水の如く』
又『春色新たなるに逢う』
寒梅『伴侶と成す』
天地『一人』

⑥ 湘南落日

青山『海に連なつて尽く 潮水』天に接して
流る』
落日『煙雲の外 只』富岳の浮ぶを見る』

⑦ 白砂青松

砂白く『松青々 海青く』波白々』
古城『山下の路 日々』往來と為す』

⑧ 鎌倉雑詠

故人『半ば鬼と為る 生者』果たして如何』
昔日『同遊の地 花に』対して感慨多し』

⑨ 絶句

数箇の春鶯』 柳辺に鳴く
数行の『過雁 蒼天を渡る』
窓に含む』 東岳の好春景
門に泊す』 前川万里の船』

⑩ 愛宕山

愛宕山』入る日の如くあかあかと』
燃し尽さん残れる命』
(くりかえし)

⑪ 吾死なば

吾死なば』故郷の山に埋れて』
昔語りし友を夢みむ』
(くりかえし)

⑫ 人は人

人は人』吾は吾なりとにかくに』
吾行く道を吾は行くなり』
(くりかえし)

⑬ わが心

わが心』深き底あり 喜も』
憂の波もどどかと思ふ』
(くりかえし)

第十七回 全国吟詠大会 指定吟題の変更について

① 「秋夜読書」

ひとり坐せば 寥々として 秋気涼し
案頭 巻を披けば 感方に長し
隙風来り襲って 燈光乱れ
明月輝々として 草堂を照らす

寥々||寂しく静かなさま。

案頭||机の上。

隙風||すきま風。

輝々||輝くさま。

草堂||粗末な家。自分の住んでいる家を謙遜していう。

秋の夜の読書

独り部屋に坐っていると、寂しいほどに静かで、秋の涼しさが身にしみる。机の上に書物を開いて読んでいると、いろいろな思いが浮かんできて尽きることがない。

すると、戸の隙間から、風が吹き込んできて、灯火の光がゆらゆらと揺れ、消えそ
うになった。
外からは月の光がまぶしいほどに輝いて、私のいる家を照らしている。

【解説】

幼い頃から漢籍を読むことが好きだった西田幾多郎は、明治十五年に小学校を卒業後、金沢へ出て、井口濟（号を孟篤。当時の優れた漢学者）に師事しました。

この漢詩は、西田が十三歳の時の作品と言われています。「②秋郊聞笛」とあわせ、

明治十五年十月十日の作との記録が残っています。
西田はこの頃から漢詩の添削を受けたと言われており、この漢詩は井口孟篤の指導のもと作られたものと考えられます。

② 「秋郊聞笛」

秋郊の風景 満眸晴れたり
寂寞として遙かに聞く 玉笛の声
尤も憶う 今霄 感慨多しと
他郷 忽ち起こす 故郷の情を

秋郊||秋の郊外、秋の野辺。

満眸晴||見渡すかぎり晴れわたっている。

寂寞||寂しく静かなさま。

玉笛声||美しい笛の音。

尤||とりわけ。

今宵いまよ 今宵いまよ、今夜。「宵」は「宵」に同じ。
忽起いきなり 忽起いきなり と思ひ起こす。

秋の野辺、笛の音が聞こえてくる

秋の野辺の景色が見渡すかぎり広がり、晴れわたっている。

辺りは寂しく静かで、遙か遠くから、美しい笛の音が聞こえてくる。

とりわけ今宵は、身にしてみても深く感じる事がたくさんあって、次から次へと思ひ出されてくる。

故郷を離れていると、ふと故郷をなつかしく思う気持ちが湧いてくることだ。

③ 「春園歩月」

地上ちじょうの清光せいこう 霜しもを踏むが如ごとし

夜遊よるあそぶ 恰あたかも仙郷せんきょうに到いたるに似にたり

好よきかな 春月しゅんげつ 花上かじょうに輝かがけること

一苑いちえん東風とうふうに万樹ばんじゆ香かぐわし

歩月しゆげつ 月影を踏んで歩く、月夜に歩く。

清光せいこう 清く輝く光の事をいい、ここは月の光。

仙郷せんきょう 仙人の住む所。俗世間を離れた清らかな地。

東風とうふう 春風。

春の園を月夜に歩く

地面の辺りの清く輝く光のもとを歩いていると、まるで霜を踏んでいるかと思われ

る。夜、出かけて行くと、仙人の住む所にやって来たかと思われるほど、俗世間を離れた清らかな気持ちになる。

ほんとうにすばらしいことだ、春の月が花の辺りに光り輝くこの風景は。園内には春風がそよそよと吹いて、木々は芳しい香りを漂わせている。

④ 「秋夜故郷を思ふ」

夜風よかぜは颯々さつさつとして涼すずし

明月めいげつは白しろきこと霜しもの如ごとし

ひとり坐ざす 書窓しよそうの下もと

頭こうべを低たれて故郷こきやうを思おもふ

颯々さつさつ 風のさつと吹くさま。また、その音の形容。

独坐ひとりざ ひとり静かに坐っている。

書窓しよそう 書斎の窓。また、書斎。

低頭ていとう とうなだれて。また、物思いに沈むさま。

秋の夜、故郷を思う
秋の夜風がさつと吹いてきて、涼しいことだ。
明るい月は、その白さはまるで霜のよう。
独り静かに書齋の窓のもとに坐っていると、
物思いに沈んで、故郷が思われてならないことだ。

【解説】

この漢詩は、明治十五年十月十五日の作とされています。西田幾多郎は、この年の五月に姉の尚に伴われて金沢へ出たといわれています。十二、三歳の少年が親もとを離れて五ヶ月もたてば、かなりの望郷の念にかられていたものと想像されます。

転句（第三句）の「独坐」の句は、唐・王維の「竹里館」に「独り坐す幽篁の裏」とある句を踏まえています。結句（第四句）の「低頭思故郷」は、唐・李白の「静夜思」の結句と同じ本文。盛唐・李白や王維の有名な詩句を踏まえて詠むことによって、唐の時代の詩人との心のつながりも読み取れて、少年らしい純粋な故郷を思う気持ちが伝わってきます。

◎新規追加

「絶句」

数箇の春鶯 柳辺に鳴く
数行の過雁 蒼天を渡る
窓に含む 東岳の好春景
門に泊す 前川万里の船

数行Ⅱ数列に連なる。

過雁Ⅱ春に北に帰る雁。

窓含Ⅱ窓の景色を額縁の絵に見立てる。

門泊Ⅱ家の門前を流れる川。

絶句

数羽の春の鶯が柳の木の辺りで鳴いている。
また、数列に連なる、春になって北に帰る雁が、青空を渡って行く。
窓からは、東の高い山のすばらしい春景色が額縁の絵のように見える。
家の門前を流れる川には一万里もの遠くへ行く船が停泊している。

【解説】

全体に唐・杜甫「絶句四首（其二）」の影響が色濃い作です。すなわち、

両箇の黄鶯 翠柳に鳴き

一行の白鷺 青天に上る

窓には含む 西嶺千秋の雪

門には泊す 東吳万里の船

という詩で、具体的には、起句・承句（第一句・二句）は、杜甫の詩の起句・承句を、転句・結句（第三句・四句）は、転句・結句を踏まえています。